枝桑拾葉集

改正

自九の養
至壮の養

伊地知文庫
文庫20
361
2

文庫20
361
2

伊地知氏書冊

拾葉集 玉川家別和歌書

第九卷ノ　月　録

第十卷ノ　奉賀法皇五十和歌序　大僧正慈円

十訓抄序　菅原為長

〃　秘風抄序　小野孝顕

〃　紫明抄序　宗寂法師

〃　系図又字抄序　釋阿法師

第十卷ノ　奥外記入道記序　法印定忠

〃　新葉和歌集序　京兆殿

能勢文庫

第十八紙　神自潔之序　　紀阿法師
〃　同　跋　　同
第十六紙　淮后道義之序　　同
〃　後小松帝外遊之序　　同
第十七紙　連珠合璧集序　　後小松帝
〃　釋門十六人詩仙序　　後花園帝
第二十紙　吾乞寺記　　法印尭恵

奉聖徳太子和歌序　　同

やまとの国はなつかしい影をとどめて取り出でて共
もろもろをすべきなれば言はなれば賢大師も
二諦はなるべきなれば行ほどとなりて左子
乃師者言行平を以仏法乃縁のことなれば
世世地獄にしたがひ元信のうるはしき和
うしろにたるれば言はまとうるはしき和
平乃ことも　なのやうるはしき
まうるべきことはしまう者仏法
み二諦乃ふかうるはしきことなりと

ふをやとしてこと平乃なしている秋と
ふうにまことの乃ちい迄ていとく
ものいと吉野の也秋乃あの月なしい川の
ようもちろくようやこうすまし乃ちいあ
行迄とみそうあたりなまれてこうそも
行くのくなん唯心さしろれよまうきく
たこ乃所あくれることのくこうそやれ
もあめさうよみのい当ていハ行くのなる
ていいこやこそをとみくこうて問まこ
をたるよさにきもろそこと細更あこ情
なる者をはこる人行れくわのまり風信

こうそろもやとて正月つりハ紙ひろ日れ
当こおのりまの只りまてるみこう
ち つこと書てきこるはとなて中宮
ちまり乃あよなのつ行こりから

十訓抄序

菅原為長卿

夫世中にあるひとわさをしるべきものにしてはまことに高位顯官を合次第するも得がたく思ふ人多かるべし。されども何ものぞ学ぶべき所の書にはあらず。物語を抜きて若干の葉乃なかにて御をこの抄を記しらせて若方をも見をもあ悪為をも見をといはんしめ作いはるこれをもまるべしいとさしんず年ばかりをしてんば侍くるまもしまとるまるしめんのもあり。紙に十訓の篇をわかちく十刻鈔となつて別に巻

のみとして之修し学むとする人和字
とえとして必ずと業の体あえ多くもみん
ものめやもろんみと思ゆるかと例漢乱
と次ふして廣くみの道をとふ法きん
ものゝ本をろんみとゆゝあるべきをいふて
むかしき詞をかさねて法實のたりをあ
つむ道の傍の埴をとふとを詠ることほんと但拙き
方城顧し秋の蛍のえをあいめもして凡月乃
をとゝくもゝ去の蛍の物を学とされを絲行の
曲をうとゝ藝るくゝ弦をうゝ胡月なくて流
うあまくの露哀と送れるけをうあをつを

てをとゝわ苔かきあやまれるをのをと教猿
乃侍らうんくの湖をとつもゝくを教ゝ志
の仏而をゝふくいゝやまんとてるゝ一拙乃
うのをもをみの紀を思ゝ口葉の因をとふ
まされを賢良の法あをとをい佛乃をとゝて
をしもをゝ似をつまいをゝと志いゝ諸法実
相の理と業をゝうゝか乃牧を待法の戯遥く
説佛楽の縁をゝ吃やをとをれをを嬉い直
しさを動る有をあ体ゝ法門のんあい
くれいさゝめやるゝ何の悔ゝあゝ来光に
乃て建長よりをのみ祈を月のすのにをの

はるいと面あきん宗なる折ぬしにもあるにも
川原東の院を東山の麓にしめて蓮の庵を
西土乃宗ふのをしへ称念仏のいとまなく芝をなし
をりなること志るされたるをとまんいつまで

秋風牀序

小野春雄

やはらく頼乃はちをひろくしていまやなく
まなびにしてきはめて此のなましきれ
まいはこの月れさらしるる秋まくらいゐにく
乃あともとあらぬか哥のちよ経をしさともし
歌人あまうすするもなるをれといりんと
をるまとのくるのみなきとをれしれいやし
きとはいいも沢家をはしるとあるなる
人々をもれちも前大納言為家卿なとすく斎
のをともきはえくとろ志をくるみく見るなき

しかとえしるるとりてしてやさしく
ねうへるうやうをつとめて上陽の人よりもれて
更落に似むれをもて似ることを乗原
まのあるさはるとけるさあ原
かちくのとあさしすれるしく
こまくの里よりちうけるを
秋をてのうこるとはの四月
ちう沢をみるの花をなるを
いくぼくるめくおつるるみてうの
をくまの月のうめおをく
正三位知家つをこと葉ゆるをとをしてを

うこいすくくまちるなやいを陵園妾乃
春愁秋思うををくくを松門のあら
花をの月柏城の秋風ををとして分めこ
こををすといふ月るをこを
れひくをれやかをとを乗月
神を月しをいのちるれい
まくくあの葉のゆををるをき
うををうくをといふこを
あれうやかをとををををを
茶左京大夫信實朝臣をを乃をを海たう記

さもとしてころはなさけなりしさむさ
ならひのなすよみえまてもえとふるに貴
炭のおきれのゆきされあつさる後をとけし
に手くるしめくいちれかりにやもあ里宮
の侍ひきたつらて古之の紅葉をとけしつさ
とし

ゐのをぬきさもはりハそるさ紅のよれ
むくいや秋のゆぬるるらん
難すして思ふころもみちをれし
みやるさけふら身をそられつまし

従三位行能ハこの名あるふ人にかまてよめる

哥あまりもきこしねハかくれしてしれわると
おこきれととそそとりむきとしか乃ら治山れ
あさ徒ね人ふさ後るるすやいよ新古の前の
いとろ随とわて几をさ両ゆる東天のあく
るまてまといるもて祢のさるもしのとと更
通宰卿の男とるしきむしりをひとかよ
ねらんふさと

あつきの神まりおりふ身をたてこと
しる人あらふあるれともやうん

皇太后宮大夫俊成女をあそれるやうまく
後ことすくなし 顔乃さ後つよるしみそ女乃

[illegible]

九郎の悲哀はいとかなしく　魂きえたるおもふ

[illegible]

梅乃郎あるぬるまもしらずよく

[illegible]の[illegible]の月

あくかまてあぬ秋のちまれ梅まて

月まちぬとしさしろ

[illegible]やあはかいちさ[illegible]

やそわ[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]侍従隆祐[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]

大行の路[illegible]衣裳[illegible]

[illegible]宮飾[illegible]

[illegible]

かとのるぬちえの浦あさ[illegible]を

あまてる[illegible]

なにとぬ[illegible]

あはあけの宮よりくる月家

この人[illegible]

[illegible]のぬ[illegible]葉とかさ

はあまて法の[illegible]

ぬすめはきて[illegible]

[illegible]

なといへとともいみしへきとおりへんへいうるへ
くなんあしさまもうすやすらん花をしてあそ
ひ月をともそれもうら縁をとめしてあらはせるを
なあるは妙なるを詞をねりひてともちぬきそうる
ともするはあるはひさしれぬ海山の名をとゞめて
めつらしき月をとえらこゝろとおりへなうれしの
あらくひまて清行式をとこさうなる人のおもしろよめる
なるへしかの式にもいはく凡和歌ハ先花後實不
詠古語并卑陋之所名寄物之異名かくの
ごとくそいはしめてよきにしるしこの心ちは
そのあまれあなる人世くにわすれさるをといふは

このめしきしそかの式をとまりし次ちのくいはする
いち定家家隆等の輩もむかしの名人今凡
の心かはいかゝしそまそゝむことゝて服
むあまも乃やうましふおりいかしあ
まいこのこゝろれいしまるなるとあふきを
なと詞を妙なきはよるとすへしこゝろなうに
いとこま所の名をいはすして妙なるなかとと
とめおもろいあつらしきをとりちのてもられ
まるな歌をと云はしかまもるなとて

前中納言定家卿歌

駒とめて袖うちはらふかけもなし

さよふけてうの雪乃ゆふくれ
きえいる乃神なきう色沢秋風
ゆふしさをしき景ようもをし
くるゝ秋をゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
しろの色しまとふこゝろねく
おぬ人をとゝ川の浦乃夕ゝ乃
色くやりしかの月をこれに
久望乃あすてる秋のゆふ
うをていくゝ秋こゝろらん
こゝ乃つゝいとゝの山秋ゝうねく
人をうゝ見のゝ西ゝうゝ行ん

従二位家隆卿歌

あゝ乃ねのもゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
うへるゝゝのゝ秋ゝ乃ゝ乃ゝ
月をゝるゝゝ秋ゝ乃ゝ乃ゝ
見ゝ紀をゝるゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝゝゝ秋の月をゝ乃ゝ
いはをゝくゝ見ゝゝゝゝの秋の
あゝゝのゝゝ秋乃ゝ乃ゝ
あゝゝゝゝ山秋の宮ゝ乃ゝ
あゝの三ゝくゝのゝ

立田山ゆふこえくれておもひしとあれ
三川のゝ夜中に舟出や侍らん
おもしれあさぢふしのいのゝなかれとまくるに
ことかしいやしきをめてゝぬしの心のむ
風雅をそしあしらしきもことのいくやさ哥乃
たのかたくれなるとおもひてなるを月にこ
そもそもさらしへあきとこゝろつゆもと
さりとれくぬるくなけきおほくたてしかる
しかうとくなれとゆへに哥よみてそらん
とふるくさめせられさしよりて人のあさまり
なとしとすましきふしの律にる紀をとくわか次

新古今新勅撰までいまれよの歌をとてあれ
わきまへて萬代といふ集いくさにきこゆるの
古萬類か撰閣をゆるして後拾遺よりいまゝい
まへ円桐府の撰集いうてゝくやちくての頃ま
れをしかむいうまいたんやいましのなか
の如ゆうこしもなくこ別勅あまて御製い
わしるかうさねて勅をうけ三子の篇をうちま
ちりて攏門よりあるく擬さるゝ万代の名をきたる
く射にまとゆへしむかのさやおかよそうさえ
いろくりんと秘くまつねぬこゝろまたれたせて
詞林といひて歌をえりとかん名くさきてむを

[illegible]人のおろかなる詩にもれて
このゆかすがしひとりいはまほしきものなる
[illegible]を絵什乃高[illegible]も伶人と
[illegible]毋青いろわかれと畫工[illegible]
りちめるうつくしき絵をまことがくのごとく
とあるべきそれいま六義のもとむるところを
きまへ一ぐのおとらをあさらめるこ
とあれどもみしうさをうりまるせて
をうるる分すしめるものをあいめく
三石條を上中下巻とをとをく杜風の抄
といふ所り建長二年四月十八日小野長雄

ひとりすしるしをとめる日をるる

紫明抄序

素寂法師

うやこれをとゝ出てあつまの月すらをぬく世
ゝ人あまをそのうゝふとのりもれぬるをなげ
きはゆ[illegible]てゐるかもいにのうゝぬをなる涙を
いとゝ今はあいやしくして筆のそやしと
のうまんうゝ形うゝてゝそのをのふゝう
のめきるる素世をいとゝをうゝあさく
うゝめきうれもゝのををねふんをるそか
るる月をこのおのしるをいとゝうもゝ花
れをのう青をいゝまてるつゝの月をゝく

[illegible]いやしき家の風をあつさ
てとうるゝ光源氏物語をとりてあらふくせ
つきはとうるゝとうのをとゝはさ
ういくゝ和漢の口傳をあらはさんと
欲ぜしをもすなはち嬰児のいとけなき
ときはのみをとゝのゝ蛍しい藝をうたなれいを
妃のおろかしうにをぬるさを言葉ををしぬ
これするをもち枕頭の傳癖を深のれ法のう
筆をつをてうきをうを法あうを言うを素寂の
源癖をうやしあまるふとあつかうをとゝ
ひをうをうを参うをうんやをゝ牛毛のいりう

るゝをてうく簾角れ風ををさゝむうりのく
うれ故をもゝさきのいろ城まものやゝ
ををうきんのうをあゝをれをえぬるまて紫明
井といふむをちの初れ霧をもゝて〻をもれの
むの光をうをきあをうの月をうも

かな文字使うひの序

釈阿法師

京極中納言定家卿家集拾遺愚草より清本を選
河内前司行時入道釈阿ゝ讃ゝされたる附釈阿ゝ
ていくをおえたゝいわひのかなを契かた
きりあやまりあるゝをもてその家の人と
きこうる花月をもく秘問此道をもく後学の為
めゝ定とゝろうきゝ黄門ゝ上ゝ御ゝ
しの日来ゝ口ゝ伝ゝ聞ゝ書ゝ小文
巻ゝの末ゝ書ゝ加ゝ可ゝ伝ゝ侍ゝ
大概如此ゝ

家合點せられ平紀文字遣を定め親行に
抄出並濫觴に加へ行阿思案を加へ權者の製作
として其名の標準の字伊呂波に編なして
文字のみをしるさむいろひをも江戸へ同讀乃
あまりてたりめ名別の要用に作りふへき謂を
然ば先達の將華編されしるものとある所先
非のまをとひしりんかあめに近く勘へぬしきと
あら須支よりこそわかむらぬの字ホをあら
しくたましく年こえ及ハぬかによりれな
ちるかよふむかしの後さるぬハえうしなるしき
ハまりて其ホを半年て流しを次孫への記等

奥州後三年記序

法印玄慧

朝家ノ文武ノ二道ハ天ノ運ヲ扶ク
山門ノ弘誓ノ安家ハ政理ヲ扶ク
歟代明時ノ佳業ヲ以テ神明佛陀ノ余化ノ
ハ[illegible]ト云フ[illegible]ル
十六代清和天皇ノ御子貞純親王六代ノ後胤伊豫
守源朝臣義朝ノ嫡男陸奥守義家朝臣八幡殿ト号
シ堀川院御宇永保三年ニ奥州ノ住人安倍
[illegible]ト奥六郡ヲ領セリ鎮守府將軍清原武
則ノ孫荒河太郎武貞ノ子真衡ノ富有ノ奏ヲ

の行伝に記して一族ゐ〻帰従するもの是し
秀武者ゐ〻ゐ〻と雲霞の如くにして合戦をいとはず余
殃廣く及て世に武勇家勇をせめらしに
大軍ゐ〻をなく〻勇士多くあるふ戦しを乃
ちをゐ〻をなく〻大打軍陸奥ちの武徳威勢
上代にもなく又稀なる中に人となり
しる仁義を湯和の気質に加へ雄
をゐ〻智略を天性の方略に蓄ふ武士孝別
膳の礼をもつて人をもてなすあるいを
出流没落の朝堂をもてこれを治めて寛
治元年十一月十四日大歓をもて滅亡ゐ〻殊黨

ゐ〻を誅に伏をを後解状を勅して参内数
感むをしりゐ〻信呼てこれを八幡後の後三年
の軍を稽を星霜をおくあるかれを投佳名
ゐ〻ふるをれゐ〻源流をく放して今にいをて
又除れるを古の忌歌を乃威徳を作の
ゐ〻し世をのしかをゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻
ゐ〻人をを〻後漢乃二十八将を歌を凌を
て写を〻朝賢重障ゐ名士を紫宸殿小屋せ
ふ所に今に伝を調をゐ〻もゐ〻ゐ〻
系由に伝きて此書屋南谷に高深をして
を切を拾を玄蔵論に伝といふをなる児童幼

学問をもつぱらにして撰作に営中は花を枝に永日
閑夜の寂寞たるさは家郷に思ひ出でて
うわ紙にあらはしぬ嘯風弄月の吟詠より興
ものを後京極徽のうつしを再写のたしなき
事ども筆墨に及ぶ今石の秋に孤屋の
雨夜は此ものを慰むるに堪ぬ感せさるや
于時貞和三年法印権大僧都恵一の序今
〜て大綱の小序と記しぬ

新葉和歌集序

宗良親王

あめつちひらけしはじめ高あまの原の代にうつりもかはりぬれはさの民となりてをのをのなりはひをいとなみ
ならはしにしたがひて歌をよみ詠ずるこゝろはいにしへ
ひとしかりけるを人わろくてわろきさまにうつりかはり
時代をへてはるかに花の葉の
ふかきかをしたひ月の出の
むかしをこひてこゝろをなぐさめ
思ひをはるけんとするあはれ
なるものはこれにしかしとも
なるこゝろをあらはすこと
なりぬ

あるは元治のころの秋は後のうち浪の音韻か
をきゝ白河のわたりといふ大の事を志たひて足更し
うち絶るくうれたる事を治めたる正しき道を尽されし
し後鳥羽の上皇の御代すなはち御撰ありあとふか
つかのあめのしたの人のこゝろをたねとしあまねき御恵
みそのしかくあしたにゆふべにうつしきはしくとう
比らちもそひとつりまくとなかれしつと一家
そなたのつゐをみちしせのこえやなれたる
や経りまゝとむかし唐土の白とをさむ世の
めしにさくなりられたちをやなる新作の事
をはるのすがたとするはかなみそのさかしきと

うきはるにましく大和唐土につもることを御代の
道をとをかくしいるへきせ給ふかふんへもつたひつたえ
まれて伊勢の海にむと元すにあさか山の言葉
もみなみにすんおもく作りをまつられといふは
あつめたりけむ月をまうもなうめいのりに
よみかゆくなるいなかんあかもちう家の呉竹のよ
のくるそはるけむてと三代の御門のはうく
和哥の浦の石の携くる七十の志かはをみち
ぬけるうれしうた作るあさゝぬけりけるかめし
むかしき昨日の篇としきさにとあきられき
ふかきことの数の色しきものあなたもあはれなぬ

さくらの一枝をたをりてこれをこの人々にとらせ給
へ四方の世まで後とん世の見元弘元
年の比とせの間の事ども
てかの国の人々はをりしかの人々
葉ことを玉の義今
ゆるされてのちかたらはれまゐらせ
ゆえいさゝか事あり
なつきく新葉和歌集といふ
紙月を弧竜をとりて
ゆるされかゝる別とかゝる事の
いとゝ水のうれをとくくるを光とやをりて
ゆきまくちらいとゝとくとい鶴のこゑ
のはのあとをゆてをまるいとのこゑ
をしいくもれとこゝいねぬあふをいのあい
うれ高くかりいこゝれあるを異行のうれ
忘をれ世ゆなをきてをうゝみをゆこちかりいを
のこゑふのさこいれつねをぬこゝわをこゝみ
まこゝをしきれ内ゆ
こゝやゝ海のかゝまくとなみ風の音忘ゝ
てゝ入田れ鶴のこゑまくとい住吉の松
ゆこせとこゝをこせ始こきをくらきのおりんひを

ときいはひさてまつるはいはるかまてんかひさしうこれ
ことをおかりはあしたれくらいくさの海ありうらは一
御のまへきあるとを光をまけ月なりとは
とし田るの海乃波のさゝなれとこゝろさゝのいそをせ
にもとよしも家々の言葉風よちり浦々のをしたか
くさうれりしせるをくひとえすれよあしさるへし
とをくゝえしいあつむる事と啓て的円のも
つらすることをさられてあめのしたひろさりしくあ
とひとめとすむるとをかれもよろしくさはあるぬを
もうしさるかり今勅撰をすそらの御代にし乃凡
ことのへとうしぬるて色のさいくいのそこはる惠

よろこひ乃あることぬかとられあまれ星光にし
てところくあしそすめなをして弘和元年十二
月三日光を叅をおかれよし世名りとをつさかれん
人もいよく難波津のあすれんはなれとも時すり
あさんとをしてあまねく鴻の名あつめれ代り
かこへたて玉乃ことなの佗のゆるさるのしことも空の時
うきえめ秋の夜のなかきを万のとしまこて
めはし緑ゆきく衆をやうて濱ちとりのあとくゆ
るまうくあめなりく津ちえしくして秋代の風
まるゝまあつめしめてと

新自讃歌序

同

我が花暁の陰かのうちもむかうより
わかいとまもなくさめにゆふの松いろ深く
うちなびく春の風のいとうきかぜにうつる
なき身はあとさきをわすれむしり花は
邪しまにすしつる里をたなびきていまは業の門
さらにうきかぜ吹かめるうちに六十余廻は業の
夕まぐれのよりはるかにいつしか三十一字は
春のことのはくんのうふるまに世俗事を
はりへて水白のことの
因果を知すれば

明りを憑のうしとい山の端の月もと
とうるふる月はうるとまに紙ゝもつれ
あのはゝ〳〵すりてかゝしうるさしく
をつるるしはるきその中に情あるは
忘れうるく藝なさハ志のいうて志うるを
いとうるをハ耳をうるうるむうあうしるれ
もうるうるふ風を例なうむうるゝ 廻雪ハ
月をおうるうすおるるもてるそのすうる影を
うるもしうるうる時うはうるまつるるめるハ
ゝるゝうるて耳ゝるるみるるゝあるるいす
つるうるるとうるるるゝ梯なれるうるゝ路も

却るいあるゝるるるるのるれるるるるる高陵
原乃春の秋れはるる月を海ゝ明れ秋の
あゝ〳〵澳河あを泳るむもるのるる月乃
ふるるるおなれハむゝなゝ〳〵はれいるるむ
まいるのいあゝをるるるるるるるるるる
かゝゝるうはるるるあるれハ河行れ世る
はるるるて秋のるるれをくむ人るるるみゝ
うるいるるるるゝはるるゝうるれハ玉梅
金國乃砌よハるれくるるるるるるるる仙宇れ
をるるるあるを佛なる秋明佛陀乃ちるれる
いとあるゝ といるるるるるるるるるるる

すこしも晴天乃月のかげのさえ水にうつせるを
みるごとし又ハなかれ乃ふもとに若紫のゆかりを
たむるやうにて下總のくにをとほりて水ゆく
よそめなりとも見すてがたくしてけしきとりどりに
あはれなる所ハ源氏のむらさき乃ゆかりのくさぐさ
うつくしく雲霧あ子程乃さかひ東土をへだつるを
てらしけれども一そのうちに千万乃たから
あつめてこれぬともみるをもみちんらきを
なきまかせに清きなるハ皆但あつさゆく
よのたすけ人乃ゆききすつさきハあはれなれとも
たくまきなきなれバふかくこの所あまきことにけさ建氏

むかしよりすへてをさまりたるしめをもちて古河をもて
正元乃いまの御子まいりてわすれにしもまゝまて
をさまりとゞめてゐもつのことにあはれ
博陸槐門にあつてもいやしき何よりもよろしくも
三笠山のあまたく天下に我のかたのかたをも
三千六人にかきてそのし十そそを記すると
おもおもかつらの藻しかまいみはそらしのく
かきあり川ものまゝあつくなりてし 櫻のまつ枝
あるき跡をなふらゝてけて なも代々み
御製にもそふれてうき入江ふくまかせてさしいハ
ゆかしれみるゝ乃清法乃まをみてき筑波山

こゝ者さ本の葉ふたひらふんはしりのうへ
に書つけうたゆめさゆつさゆふこれを
の者うてまつれ　大あるま梶
とりあつめうたゆ人形もあるべしもとも
性てこれをれと十あまりて記りもうる事
うこゝあなうとまるぬとめたる行を
ムまうもうてあるしもうれくまれあもハ
はうそハあやまりもちまく行めたるもと
世乃うあみてあいの人乃をもうして
えうとたあとあいの田子のこいうんのうを
やしなうもうこをつうるゆつて懐せい

うらまかくしうりてはさゆふ乃まてはをい
あとをんとくなるの者うこを志水りうさい
しては四乃氏土志めり志のふてれハ鈴波
江乃うしあうこもうれうハ志をあめ和
らあ于時元元年こいのとゝ仲春文日
なゝ

同

同版

いはのうへにあるさゝゐれはりにたるさゝゐにあ
のこりなしに秋の田のいなにかけてきやいく
らもとゝをかまよるさゝゐの露のこゝろをさゝく
ゞやきんことはたゝるはなるこゝ
ろの中をいとすゝるれハやそのの人さ
むふこゝろすらあなもとさきをいうるれ
ちよすとあるくこゝろはたゝるなきせのるれ
おれゝるこゝろのいのちなるこゝるねハ高れ
方乃はすこゝろにこゝるあるこゝろをの

はうしきこれを志のあまりとなれ
とて元亨元年の中秋三日
おれをうけしらめむといふ志なり

淮后道義をいさめる辞

藤原雅縁卿

鹿苑院殿の乃れ事いかなるものなりとしまうあさの
うあへおくうくれさ白拍子事なりむさ
世のおろかきうるしたをんふ
ちへしたはうる世をおさめてを人をあすけ
まつりうをもとしこ為をかたこ給
事世のたつる所なれをを文ものへんもおとなる
らしくや宋雅とし申ひさしくはう出てま
ひる事をんつかなる方なりも和哥乃うち
ゝ三つうれ蹴鞠の場ともなむるもてまつら

のこりなくあるいは宸宴公賛まで時とも
いはるゝを神事法会のおりよりぬけ出
るこゝろもとゝのおとゝまるこの人
とすれをぬのこすこゝろ事をゝむるゝおよ
ひろゝ中より世さるの行幸む月乃ぬよ
ぬさるこあつるく花乃こゝろをとゝやくをぬの
つゝくしを二月のすぬぬゝとさきのゝれ事
供奉の人こをもゝのかされを一和乃ぬまるを
諸家まいるゝこゝとゝさまゝゝよ侍しゝ色ゝ
ぬあゝひをつくさしぬ侍きゝゝさゝなるゝ
ゝ詠乃をものつゝ侍きゝゝゝをつきすきを

きゝゝをおゝゝ侍ゝ時とあいゝく乃ゝ乃ゝゝも
さゝをゝゝゝゝれをよゝこをすゝいふゝを
ゝゝゝゝゝゝなゝゝあまつ日つきぬゝゝゝ
くゝゝゝゝゝ世六年乃ゝ行をし
ゝゝさゝ侍つゝゝゝゝゝなめ乃ゝゝ乃ゝつゝゝ
海浪おさゝゝいゝゝゝ年ゝ花ゝ栄代の
をゝゝゝ侍ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ君
ぬゝをあゝせゝゝゝゝゝゝゝゝゝ行事
いゝゝゝゝゝゝゝ一和のゝゝゝゝゝ金銀をの
勝ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝの栄ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かいとさしたれ仏しを花乃心りなを仏
やまくふやとつくりきちく学とくて
仏もとくやらいのうめ乃ハりとさとめ
さくろを京のきしもふくくれタ月も
のとやられるおりうゆきなわ仏しまの
きこつるしれるくいとまあしさて此ゆう
つる乃紅色しの花あくきなしかま
川つねの舞市絵るとを此めなしまくる幸れる
まとかなてるの南部し信られく義章紙
やされ仏しハ中とめつるくるる玉海波乃か
いちくハ友上人本面の章るとあしまと

つまくロ十よ人のさちてなれるもしれい
ちくハ此ぬさるてくるものねとを花紅葉のお
アふしくとくなのれとう乃朱雀院乃行幸も
くくやとおほくあちちくふけるる玉海
波まくやきいあさくるくまくとくさの世花
車ともおほくく仏もくるあ此もくるご乃れ
ゑゑの紅色此あくひる乃ほう御連奇くいる
まて日くくのくくるなく仏きくいとくまい
くくの花おほくやくれ仏くや還幸いくれ
行くすれ鶴もさくくくなく仏とれああ
くくいくくくなる此今れ此ひるくる仏

酒宴乃みきりよ夜いをりよりかさりて事乃こ
たり小山院へこ行幸ゑ中さしに侍しう
おくちりされ一ゆかしい延喜をもうけこゑ
公て殿上人をつとおほうすさてを女房い
ゑりて新よ入ゑ中たり侍しこ花しのれゑく
なしさまのなりこ行こりてしき事
をつくさし侍ゑあまりゑ厳覚ゆ先祖もも
れて侍ゑんさりうゑ中事ゑゑ事を
たくさし侍しゑ人へ仮花のさめまてを
おとちゑく侍ゑうゑ内あゑひゑ中ゑ弥鞠
の道こたをてを侍あゑ女ゑゑ事家のゑ

めゑゑ乃きめかへたなき事やゑも方よゑ
まゑ侍ゑゑゆ形ゑつをゑれこ世おを
ひ出ゑてゑ川れを世おもゑのこゑれかへく
侍ゑをふれきゑ乃庭こすを人きゑ行を御
上鞠乃さ法御きゑ面すゑいたをきゑ
れおほへ侍ゑ世おほへゑ世ゑいみち乃厳儀
をたくさ礼家ゆ住名をゑゑ行ひこゑゑ
れさこあゑ事やをきめて人をゑ
ゑをゑ侍ゑこたゑゑれを中の事
ゑこあゑをすかへゑ数ゆ内ゑゑ思ゑを
ゆへなへておゆこ世ハゆとゑこ還幸有

こうかくしゆくすあ乃ろ世乃さんと
う申あい伊ろやうのあいくほとゝ月ゆをく
きてす淮所ゝ乃やうゝ申いてきく五月の
一りゝ乃ゝろとゝおりを乃ゝうゝ人ゝおと
ろきあつる事たのめるゝすれいのゝもさゝゝ
伊しゆつるやゝ乃ろあいゝとゝをこゝせ
乃ぬるゝみゝさせ乃とて人とゝろこれあく
ゝりふゝあやめのたゝねゝもふとせの英武
むすれゝるゝつゝこゝいゝこゝ事ゝ乃ゝて伊し
ゝゝむゝ乃ゝすゝゝつゝをゝおゝゝを乃ゝすゝ
ゝりゝあゝゝきてゝまゝ乃ゝ伊しゝあけゝゝを

六日ゝゝゝゝゝのゝすくなゝゝれ事ゝゝく伊
ゝゝゝゝいゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
かゝゝあゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とのゝ家なくなりぬ。伊勢へ。さて十日ばかりの
ゝくさゝて伊勢をとりて焼香まゐ
りていまこゝにぬけうちの鐘をきゝわたる
かゝくおぼしてれば陀羅尼をよみ
してすさゆくほどに九日の夕べのことなるに
えうまれぬおぼしてあるに九燈と
きもののほゝせをかしくた
ほゝ伊勢へ参りやうく深切かくてこゝとあ
るべきなりれば寺まゐりして伊勢へと
もたゆのもとにとゞまれば伊勢正月をすの
ゝ山にとかくぬきてあるに徒もてゆくに

伊勢おつてまゐあるに人は鳥のなきこ伊勢に
つき伊勢にもゝのやうにもゆるゆるやさ
うにさて伊勢をおつてもあられをわた
かされるつゝうゝ伊勢へ

かゝるきはにさぶらひて世
ばやなすことをゝつゝあなくくん
かくて伊勢にもゝのはなちゝさそのれ
ゝきゝうゝ松もゝをさきてまゐつる
紅をうゝを見つゝもなくさうゝて伊勢へ
をはまゐりてゝみゝ一きてまいるい
かゝれ若おもをゝ伊勢へ

きこえ侍る

立のほりけむ乃跡をたつねても
かなしき身なるにいかなさ
れ日すもやうくはかりもたちかへりたまはれかし
やこあはし給ふ事やもそすくくおはしけるいか
侍るまゝ思ふし身はあやめし給ふくうきかねを
うへ侍りけるまたちかたさいふれ事なと我人か
侍しともまて世に星乃日ちし侍る人のかく
やはらかし侍し

露よりもとしるかなき月の前ちかく
なつかしきなといのち侍るこの身

すき川を經たすきゆめ乃みちの秋
いつまてかすらふなと思ひゐ侍し
まつらを陀羅尼香をまいらせかく侍る
あはれなりとおもひまいらせ侍りしきのくのすに
まいりしに侍りしつへあみ萩の葉なとうつしおきてま
つりたまいとよくかきうつさせおきてまつりて侍る
事ありてめしむかし申けん侍りけりとおもひつくると
見ゆるてまつりを為に有しなかしあれおほえける
つたへのみちやうよみしかせ給へるをいふあり
詠ませ

物ならきそれはおほかたわかれむつかしなる

[illegible]ひとすなはちいかきれを
世ろろ面ひさしくぬ[illegible]ゆ[illegible]て行幸奉幣か
とをこなるる神宮か典乃出行と出ひきるれ
[illegible]ととはやくすれたるもなくるる日数ほろ
ゆぬる事とてくるしあてるる
さしもろ涙ろ面をたれぬるり
くるるとをみるぬ[illegible]る
前関白ろ出ちうるあるか世出事なき記
おほしすまやとさるくうもなるるる
やるか

郭ろなるくれるるるるるのまり

ろ乃まるつるさる月やるる那
出西しる
五日やるねるをなるるを沢
ろ涙ろやなるるさるん
三十ろるあるろ伊ろ日出法事ろて出寺よ
ろるるいて伊しる徒乃おるるまて
伊ろるるやらん和田寺ろて[illegible]ものるるを
貴賤ものあるるろ乃おるるるるる人
人ろあい伊ものるるるる乃吾根をのこれ
こあるる事ろるなるるるるるるる法寺法山
乃勤行出延吾のるる言るるく伊也るるる

又安芸乃海剥ていとうまつりくゝあるちまち
奥樹の宝祀をもとあるらしあるまゝ事なふ
まうこうれつ伯ゝとめてくゝおほゝあ

くもりなき紀元のさとりをひらくゝ
されば法華経一部を卒都婆にゆゑん
あれ四月十九日乃供養ゆあるせ伯ゝんとてかさ
伯ゝるさしもちうさたとを奇乃うちをのこれ
いるるこあ四ゝ伯ゝるさてぬるさ集ゝしをたし
めゝるあゝ多ゝ杉物亨今ゝいまるゝまてうるあ
てまつまと伯のこ伯ゝ乃宴れきしあと

をれ前ゝて申ゝうきゝ久字法ゝしるゝとゝつきゝゝも
義のゑまたゝうゝ事ゝも伯ゝおいたゝうしきう
ゝきゝう卒都婆の弥をゝうゝれあゝをゝふし
ゝてまつゝんとゝまる世のさゝめたゝさゝあう
ゝちゝ伯ゝ

もゝか革れ法乃ゝるゝかゝうゝあ
ゝあゝゝのゝまゝかゝうゝる
御百ケ日も福ちうゝなゝう伯ゝをれ書ゝもゝと
ゝゝ乃ゝ出ゝゝゝひるゝゝゝ番号ゝをゝうゝ
あまゝいるゝゝゝ
かゝゝゝとゝゝたゝゝをゝうゝよれ

あとうかの乃なくさめてせん

かくあ爲光陰をやくうつりゆきもを八月十五夜の

月をめくりさてゝ八月十七日に百ケ日あて

四位の山に世にをきれもおもひ出ゝ仏菩提

して良辰のもとあるひるゝ事も侍りと

ゝ思いもてをしたくれて月乃光もおもう

あるれをさしてもとしくるやの

まれもてなしあるとも遠のなるさてもしろ

やうこ侍さあり一ろう中まもちつき

と乃事まやれ爲白月の名も秋なもさう紀と

ゝしるかとあてとし侍るやうこれおもしい侍し

事ゝとはくゝと思出れて

みゝ様のもなる乃月をもろうきて

るゝ北人ろをさうゆく

實智爲明光光中もおうゝのあれをも

ゝ侍さまゝやと萩原うこなりていさか

かさくるやうこみゝ侍しおもさまろおも

むるゝかすゝしふ事乃爲ゝまゝうさやの乳

光光乃ゝ侍れをゝとゝもおくゝとあてしをの

こゝろまゝかされゝ

あゝまゝうせをうをくゝもをまゝ

月をおりし乃いろ出ゝ

世乃さまたゝなきまゝにおのゝくつきの御
ねゝもゝせのよゝもひたゝきゝせ給ふ
やうゝゝゝ品もてまつりつゝ日数なりやゝまゝ
数しつゝ世給ふゝあくるゝこゝもてまつり
ゝれ中院乃御おもゝぬしゝつきゝあゝれ
をもよすゝしゝをゝつゝなゝ心乃うちゝ
うゝきゝゝゝなゝゝ亀のゝゝゝもあゝゝし
なゝゝ御乃御ゝ西方ケ月のいゝゝゝゝまゝ事
をまゝゝりなゝゝやうゝゝゝゝ御ゝゝゝを
ゝゝ行幸ゝ事をゝゝゝゝゝゝ御ゝ西ゝゝん
なゝく御ゝゝ御ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のゝゝやうゝゝみゝもてまつりゝ事ゝゝゝし
品いゝゝまゝゝかゝゝつゝゝ御ゝゝゝゝゝ狩ゝ
待遇乃あゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
しくゝ昌癡哀然乃おりひゝをゝすを御ゝ
をゝをゝゝゝゝゝ世西美提の善縁ゝゝなり
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝおゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
事ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後小松帝御遊し給時

同

舊院の御事おとろさ敷入給ひて大こう西不豫
の御もさ沈くよりいとあり難くもおし給
しかとも治療とも小をこうねるさり
こうもおとろくなりたるこうの御させ給ぬといさ
つきよりおしらす思ひてまつ上しまうさりあ
きらに神無月廿日といふ夜おもひもよらぬ事
しさ時あうちうあ不乃聖をさそふ風の音
もいとものうもまく物まあれりよりおすとさ
おうえ給つらしゆはうしいみの御事給ひあか

さ申たうゐ　おほうちのくまんちゐ
えまちをつきまるれまをおこ　ゐしなま
ひいまちまちやの山まれ位をのうれまくても
松風治世乃なをっも結　うを万機の政を
ゐ結ちあれいとまれきうを言乃花も紅葉の
月の秋ちを詩弄管絃あるを酒宴の御
いるまちも幸つきたく毎をさ紀ちを
ちいう　乃亜の世代ちをえゆくすゐまも
あひくくちいたしうるふ数もく志のし
ちくまつすといふるなっく高おれし
さ廿七日紙きくしのほうる乗うれ乃芝の御

を出しまくまつ高東山のほとり泉涌
寺といふ所へ行幸なすべきけるに車も
あしく乃いとなれまくるに前右大臣以下の人
ちめうく人かちて供奉してまのいろ
うちちほれまち輝たり御在日の行幸より
をもいかちいみしくくてまつんさ
もちるやうなとし　夜くの行幸は中まも先を
乃秋七月のちちくよかまるまうし　乃寺へ行
幸ちくしくあいまのやうにおゐえ御供
奉の人くふ面御随分あるいるまて紫束乃
さうをたくし　紅紙をやくの伝しまと釈

八れ尊道の神西さしなのこしてまつる道者平重
迴存者新久留西とも七文眼前たちやう
よおけえ伝ふ

されるうさ濱乃露もそてのしも
をくり侍さこ君をかてゝ
おりへきく姫うをみるにもしけ
さうめなき世まきのまもいを
流半乃行すやこ伝うさくなる人やつなる
乃をみるまてまつるしも
小車乃うしはゆつる無うしなる
ゐ社をしのしはゆみとやうん

ちやくく上京運童すみうをしめ結ちゐ
ちまち海迴乃苦をまぬれ結ちんう
よさうもまこの乃ゝ南幸しゐ
この小車まわめくらなよきみ
祖れくか乃一所をくうあてまつるゐ乃ちて
まゐうをこるもれ伝ふくはめて燈と
ゐしきてまつる
清かつ思をうるしきちのほう
和され乃ちのす乃ちんゝ
懐舊ま思往事まゐ渡つきすしゐ世一家に
を形いのくうくく伝しゐハ

かゝる世月　時雨くゝる　はぬさやゆゑ　ゆゑさまのと
くちもつら　もこやれの　苦乃ちるに　うゆれぬる
ぬる雪も　つゆ仮宇を　たつをれて　ゐ十河もつの
七ゆ世も　ふるうねの　ゆめ乃ゆと　ゐもく中せ
ふまくの　ゐれとくさに　ゐまれぬ　ゐまゐ雲乃
道のみち　ゐゆふれね　いとふけも　たつくゆく
ふしふ行　ゐさ河ふを　水くさ乃　ゐゐもたの
ゐちゐう　ねを見くわの　うゐみまい　とをゐてね
浪乃ゐに　ゐえりくれ　あゐ明も　つきぬ涙の
河めの志ゐ　くゐ紀寝世の　ゐゐいまて　かさゐ者ふ
やゐてゐた　心乃やゐも　のゐゐや　ちやくさ世の

ゐちまふまし

反亭

出ゐれもゐる思乃いろ志すゐるめの
袖乃なみ　ゐまあゐれさりゐ
ゐの上も緑園ゐて　世悪ゐ神只者ゐま
つゐもあれなりゐ　かくゐ者院ゐ八世中法
八儀ゐまりて　素服ゐくゐいゐ　ゐ侍ゐう
河ゐゆくゐ日数も　祖ゐくゐおほえ侍れ
素ゐくゐち渡よ志ゐ色　なゐ人ゐ
名残をいい　志ゐし　ゐれゐ
按小松院と号しゐ　ゐてゐつゐう　さ志えし

かた

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

海の風[illegible]

連珠合璧集序

梵燈庵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

釋門三十六人歌仙序

僧正栄海

それ徳ある人乃花ハ心のたねよりなりて萬海のながれハ法のみなもとよりいてきたり玉ハ如也は久遠乃月の国を照らしてあり行らをはなれしいさまして仏のなかし八人乃組ありかくあるとこ代なりて一しきにまとて聖徳太子乃序巻山のうへ人うもしれきさ乃みち猶いし是時は仏乃栖りき心のあゆ志ありし婆羅門僧正乃梵國をもいろもし行基菩薩とおりに靈山會ぞのむかしし乃契をのこされ況彼南天の人はすてに大日世尊の鉄

塔の廉なりしを移すべきの旨を
我國にては天照太神天の岩戸を出ゐて常闇
の世なりしに八百萬神集まりて御遊
をしたりしに八日の夜の間をも
たまふとうたふ歌を八日の夜の間也
若いまして大種姓の人仏縁をもとめ
ばもとめやすきのはなれども大八洲の内にも
ちまち秘密上宗の事ものがれがたし
聚の中にもあるべしいまだ弘法大師の法性を
まなぶ人なしいかなる性海のおく地をあのなれ
事をもとめし遍照僧正の磯上布留の山邊を
いでゝ内侍の花をもとめし河内の
のべにらせし趣をあらん人は吉野山にも指を
みるべし同數花をの三昧は入部にうるやさ月
の空をなりぬべしは勢同実相のうるはしき
く蓋見ぬるべきにあらず物にはと
う同さるべき時にはと流れこの心にはと
きるべきなれば今このみくりあまり一を
しるべきをあいのあるべき實相言語皆見真言の
理にあり又ことばの所伝のまことを
らいて佛法三十六皆同自性身の宗にしめを
なるべし貞和三年十月廿日あまり乃

權大僧都堯孝

富士紀行

七月道風法師八月法浪師守戸
門をわたれば八橋のゆきかよひまりのく
おれ民らをゆつる心さしをるんりてきれ
いはくまやとりと爲をんとけるこのこおはる法
代をなりけり爲富士法しん乃御を拾ふ
ふかしなく永享四乃年長月十よ日の行と
り心を立徒なを形しを始乃爲日法浪つき
て時をみえなく門乃門乃法立の曉まりい
はしの京乃家紀すこわるのとやうるりしを

うゐ〳〵有おもゝえ侍れ

仰ぐ所の代の初もとゝまるに

ゝ侍ふ〳〵られ〳〵もゝ〳〵あうれ

逢坂越侍りて関の明神のあるほゝ

君の代よ長やうあり〳〵きあ上さの山

きさ〳〵せ〳〵さゝ〳〵ら秋のもゝ〳〵

明かの〳〵ゝゝ〳〵ゝ上山かの〳〵侍りし

ねゝ〳〵りむやら〳〵

かりむ〳〵ゝ秋の〳〵侍りゝ〳〵

ゝ〳〵〳〵ゝの〳〵やさま侍りくゝ

草津の宿あゝ

あふゝゝやあゝゝの草枕ゝゝのゝて

花さゝの〳〵ゝいつゝゝとなゝ

やゝ川の〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

てゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

をのつゝゝゝの〳〵ゝゝゝゝゝ

なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今日の〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

川ゝの日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

月ゝゝ様ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

やゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

四十九院の宿ば

にせものあるべし里の名い
やまたをぶういうのこさん
犬上と申つるまいりやかいかけをみく
しまつ秋はもとさとさこそ谷ろ人の秋
里の内ゆくてゝ山川のまとりみてふれ雨の
ひこう後をんしてやをいるて
いけといふうふかりれる川をもや
ゝつゝいとねの秋しるこ
小野の宿ゆく
ゆくすきりかり袖ゝ露しゝゝ
ゝゝしむあさのをけ山と

きりけりたゝ宗祇ゆきに祇ゆく人
ゝゝ一ゝゝいゝゝゝ山みちはらをたに
てけちふやゝゝれをみし仰
あゝ祇せよのけゝゝ橋ゝりゝ人を
油ゝゝゝけを山のうまちを
不破の関をきゝ仰ゝゝゝゝゝゝゝゝるたせを
の戸ゆくこけのこ仰て中こみゝゝゝるあを
戸仰ゝを仰いゝ世わをれゝかゝゝゝり
こゝのゝゝゝゝふゝゝせをやゝ
たゝゐ井の宿ちゝゝゝなゝて
むゝゝみゝゝ仰をゝゝゝゝゝゝをゝわを

おりふしもいと水ぬるとうの事

[illegible]と[illegible]ふく　ひさしぶり　十七里

このやまや松を一本のうゑかしを

多いねをあるかの代の松れ

十二日松とこゝをあるむかとゝろを行

う

赤らけき世ゝ[illegible]のむかの見浪法

ちくせをこゆるとのさやけき

吉野　ふるさとゝ[illegible]ゝ[illegible]

鹿[illegible]

[illegible]

赤坂の宿あく

[illegible]

[illegible]

[illegible]人のゝみちゝは

[illegible]

かけくも[illegible]

うはのやまの[illegible]

いくふくゆ[illegible]

[illegible]

雁はもて[illegible]

松さしの[illegible]

こしの朋字のもかうう
くのせ河わたるやく
夕されはきりたちそふ河の石の
色みせそうさうあやはらん
なりけりやきこゆれは言ふらはくわた
わたされるうしや
数なくのふるもしなるて
ふるもうれたるみ
しをかの四屋と中所
袁嘉のしとの四やをと絶
をつわるを社やさしをさ

をつまるこ川のそ與おうう亦乃陸さうけを河乃
かうくをしらくを海つををのをうを絶
ふをうけるふ法さをを人伝馬ひをうる
あれはあしのうをかちゆくをの花のをもむを
わはゆうををわを御ふをいかをうう
色をうまをかをたを移創ふをををを絶
一ゝをせ小山殿ゝ行幸乃附歩地ゝ移ふをを
絶されうゝくをのゝ氣ををうゝをうら
せらを絶行幸さくう義のやうをりい四絶を
絶をうはうかゝはゝを及絶ををわさ
うなを

[illegible]

尾張国[illegible]

わっぱの[illegible]

ゆさうもの[illegible]

[illegible]

[illegible]

那[illegible]日本武尊東夷征伐の

[illegible]

善光寺紀行

法印堯恵

寛正六年七月上旬[illegible]

[illegible]

[illegible]

二上川は水はらなし
やうてもとはのあるもくぬはるるる
と湖をとてとて鳴鶴見ふて夕陽
西山とのくれること
志津とし夕日の新しかとなく
ふかてもしもとのうこうる
飯東指の奥遊とはく俗田のようなていい
くなる春と高山を行あとをしるうまさ
高人と明
とたもやかたてしこん田多は浦や
ちことりの塩はなるとと

其兵なこと山ふ下る見る楓橋は長の海と
いこ知りは橋と知行と事
瞬や美ちとまとしなるはうて
なこは川さ橋乃ちと北見新
あくはなとは水橋と言ちまま
川ちる
作こはこのめなるちとや
あちとあはかとと明
ちくて立ちは千巖を雪いとしく人ちり
燥はるちつるやさもちとちの海
ゆるはちとちとは山の橋ちとく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なるらんかとすれもかたちのおやの練をけすまぬ身よやうて袖れ行く梅雨晴れ日七夕の相面のなる果れる命はそれてこれを奇異れ値遇まて伝ふるとおもふ余あれ者ようもしていけるこれ者

永人とも名のるやうの世すれ

所れ見れ捉ふ所色行て

又移色ていけるれ川といふ何あて

世中ハいう所をんいとこ川

いるこれ所をくれ者ら れに

ぬるれをハ日を成伝を北御孫ゆまを行て

来山へ志ぬをくをもの行をて絶頂より

瞻望をする烟水茫々をして山をを天涯

ゆはるなる

雲れをの清れをやをとうをなる

なるれ者の星をあをう行をる

湖をる不能をる雲の底を蕭

れ連の点うはを礼ゆをく久れ面も多

ふしをうをを打掛の神を忘れられを

や藤れ猿鈴を蕨恩し侍れをも帰長

れ市をを物を行ををして又立ち伝る

石に花笠と書て遣村に思はせる
人をめるにあり

うらみなきものとてきゝあるは嫁の面
しかれとも花笠は星
泥にくるしむ所の泥くるしき所
これなる人とゝ入る首西塔に行
快慶法師に書たる師隆蓮法
道に志るへくして文に書てきたしを法華
に書てはすやるとゝ思ふとくまに打ゝ
らにくにくる日志なのあへうはきき
石もすゝ行ゝ法ゝ行ゝ

ゝも同し國なゝ山靄ゝうゝしゝ野行
乃人ゝ指ゝ指ゝまゝ

法ゝやゝ星ゝ
ゝことゝいゝ

面に刻の鉦なゝる御堂ゝ詣て行ゝ
ゝさゝゝ導ゝ人ゝ行ゝて内陣ゝ通
乗ゝ剥ゝ本尊に瑠璃壇を
誠ゝ多勧に宿坊ゝ法ゝ法ゝ歓
に人ゝ屋に本朝御瑞現
のゝゝゝて思ゝ法ゝ
ゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ雑渡江

あまたふたてに所の月
暁に及ぶまで月いとあらはなる
て山をおろしやうく
おもしろさやおなじ
をくてやまの嵐のまの月
十五日はいとけさ宿坊を立うつりて土佐
のくにはるもとの戸隠山いとあと二年
の場籠を作りて奥院の方まこと
山のよこさくれて中臺より南わたりの
岡にものく石をうつなとく八
色をまへくに千峯万山はるかにうち

霊木異草かさなりて或仏菩薩来化し
姿とにはつ或人聖元の妓楽をかく
のへりあるとあり俗観音薩埵の勝地
てを侍へん社はかはれ峯はまはけ所
くもんうしむ大なる岩屋はうちへ
はくもへり彼御神を負乃雄とて
しまをすこと
こはるかやまに岩はかりはれ
ちとくもし社
松ちとくとて
吹おろすこのあしまにまれり

[illegible]さや岩に戸たくしの[illegible]

十六日[illegible]又快晴に山[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十七日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

遠き二ものとかたらひ給ひしを聞
れ境地と成の他にはいはくはひとも和
歌を仰きまゐらせ御新をいやうきき
新ハ何なりかと笑て給うまはきて更れ
よようのいて聖落ぬるへあきやうみて
仰ものハ
之仰とはなるまてとうあるしう
なとと更れ弁のうあのうらやき